魔法少年トーヤ

白斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少年トーヤ

【Nコード】

N6332R

【作者名】

白斗

【あらすじ】

赤羽桐也はある日、言葉をしゃべる黒ウサギに出会う。黒ウサギは桐也を見てこう言った。「今日からあなたは魔法少女なんですよ！」「……いや、俺は男だ。魔法少女にはなれない。とゆーかなりたくない。そしてその語尾をなんとかしろ。変な黒ウサギとの出会いが、桐也を戦いの世界に巻き込んでゆく!？」

(前書き)

動物虐待ともとれる過激描写あり。絶対に真似しないでください。

幼いころ、魔法少女アニメを観ている時にふと思った。

魔法少女がありなら、魔法少年があったっていいんじゃないか？

かといって、魔法少年のアニメを観たいとか、ましてやりたいなどと思っただけではない。ただ、なんとなくそんなことを考えただけだった。

だから、まさか俺がこんなことになるなんて思ってもみなかった。

その日、赤羽桐也あかばねとうやはいつも通りに学校へ行こうとしていた。のだが、いつも通っている曲がり角を曲がった時に、彼は何かとぶつかった。

「もー、一体どこ見て歩いてるんでしゅ。危ないじゃないでしゅか!！」

桐也はものすごくベタな台詞と、ものすごくベタな幼児語を聞いたような気がした。

目の前には何もいない。けれど、確かに今、何かにぶつかったはずだった。

「ちよっと、どこ見てるんでしゅか!？」

再び聞こえた幼児語に視線を下に向けると、そこには一匹の真っ黒なウサギがいた。いや、果たしてこれをウサギと言っているのか謎だった。その姿はウサギのだが、それは何というか、デフォルトメされたようなウサギだったのだ。

まず、耳が長い。それも異様に。身体の倍くらいの長さは有りそうで、しかもロツプイヤーのように垂れて地面に引きずっている。そしてなにより、はっきりと桐也を睨みつけている。

「…なんだこれ」

とりあえず、そう呟いた。

するとウサギは憤慨したような表情を浮かべた。そんな表情が浮かべられる時点でこのウサギは変だ。

「なんだとはなんでしゅか！あなたにぶつかったせいで食パンを落としてしまったでしゅ！」

黒いウサギはそう言うと、前足一（手？）で少し離れた場所を示す。

なるほど。食べかけの食パンが落ちてている。

「……」

桐也はそれを見てもなにも言わず、じっとウサギとパンを交互に見つめた。

…このベタな展開はなんだろう。

ウサギがしゃべっていることも驚くべきことだが、それに加えて

この展開は一体何なんだ。

「…あれ？ここであなたが冷たく言い返すのがこの場合のお約束なんじゃないんでしゅか？」

ウサギは無言を桐也を見て、きよとんと呟いた。

「はあゝ、ノリの悪い方でしゅねえゝ。…でもこれも運命の出会いには違いないでしゅ！！ たった今から、あなたには魔法少女になつてもらうでしゅゝ！！」

「……は？」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。そしてその直後、目の前が真っ白になるほどの光が溢れた。

「……っ!？」

反射的に目を庇おうとして両手を顔の前に出す。しかし、光はすぐに消えた。

なんだったのかと思い、そつと目を開けると、まず自分の両手が見えた。

それは当り前だから良いのだが、何故か自分の服の裾にフリルの長いレースが付いているのが目に入った。

直感的に嫌な予感がして、慌てて自分の身体を見下ろした。

「……!!!!!?」

あまりの衝撃で声も出ない。

なんと桐也は、ゴシック&ロリータ風の衣装を身に纏っていた。

恐ろしいことに下はスカートで、右手にはいつのまにか黒いリボン

のついた杖が握られている。

一瞬にしてこんな姿になってしまったことに酷くショックを受けていると、そこに空気を読まない嬉しげな声が響いた。

「やったでしゅ〜！！魔法少女の誕生日で、じゅう…」

ほとんど無意識に、桐也は黒ウサギを踏みつぶしていた。――（踏んでから気が付いたが、靴は踵の高いブーツになっている）

「俺をこんな姿にしたのはお前か？」

黒ウサギの上に足を乗せたまま、桐也は冷たい声で尋ねる。

「…そ、そうでしゅ〜…」

黒ウサギは息も絶え絶えに返事をするが、どことなくその声には嬉しげな色が混じっている。

「それで？お前は一体何だ？いや、そんなことはどうでもいい。いますぐ元に戻せ」

ぐりぐりと力を込める。すると聞こえてきたのは歓喜の悲鳴だった。

「は、はわあ〜。ノリの悪い方だと思ったら、まさかのDS女王様：ハアハア」

そう言って、黒ウサギは上目遣いに桐也の顔を　いや、スカートの中を見ようとした。

その瞬間、桐也はまたしても無意識に黒ウサギを蹴り飛ばしてい

た。さすがにやり過ぎたと思ったが、反射的な行動だった。桐也は蹴り飛ばした黒ウサギから距離をとって話しかける。

「戻せ。…それから俺は女じゃない。男だ」

後半は特に強く言った。

先ほどの黒ウサギの言葉を信じるなら、今の自分は『魔法少女』になってしまったらしい。だが自分はれっきとした男だ。この勘違いを一刻も早く訂正したい。

しばしの間を置いて黒ウサギが顔を上げた。

「…ふあ？」

顔を上げた黒ウサギは鼻血を噴いている。その顔を見て少々罪悪感が湧いた。

黒ウサギは桐也を見て、ぼーっとしている。まさか打ち所が悪かったのかと内心冷やりとしたが、それはすぐに杞憂に終わる。

「……大丈夫でしゅ」

何故か目がきらきらと輝いている。

「男でもばつちり似合ってるでしゅ。もう完璧でしゅ」

桐也は黒ウサギの言葉に思い切り顔をしかめた。打ち所が悪かったどころの騒ぎじゃない。

けれど、黒ウサギの言葉はあながち間違いではなかった。

桐也自身はあまり認めたくないことなのだが、彼の顔は中性的な容貌で、さらに身体もスラリとして細い。決して軟弱というわけではないのだが、性別の分かりにくい服装をしていると女の子と勘違

いされることがあった。

「…いいから早く元に戻せ」

もう一度蹴りたい衝動に堪えながら、桐也は黒ウサギの長すぎる耳を掴んでぶら下げた。これもかなり酷いが、蹴るよりはいいだろう。

「無理でしゅ〜」

黒ウサギは鼻血をティッシュ（どこから出した？）で拭きながら言う。

「もう貴方は魔法少女になっちゃったでしゅ。魔法少女にクーリングオフはないんでしゅよ？」

「俺がいつ魔法少女になりたいなんて言った？」

ウサギはクーリングオフの意味を間違えている。

「それに、何で男の俺を選んだ？魔法少女なら女を選べよ」

「だってあなたはパンを啜えた黒ウサギと曲がり角でぶつかったじゃないでしゅか」

「……」

「これは運命の出会いってやつなんでしゅよ。あなたがパンを啜えた黒ウサギと曲がり角でぶつかったことで、貴方は魔法少女になる運命を背負ったんでしゅ！！」

きゅと頬を赤らめて一（何故？）力説する黒ウサギ。

あまりにもアホらしい気分になり、桐也は何も言えない。

だが、この精神的拷問に等しい衣装を早く着替えたい。

「俺は男だ。魔法少女にはなれない」

とゆうか、なりたくない。

だが、この言葉がさらに事態を複雑にしてしまうことになる。

黒ウサギは桐也の言葉を聞いて、少し悲しげな表情を浮かべた。

「しょうがないでしゅねえ。じゃあ、魔法少年にしましゅ。別に名称はどうでもいいでしゅからねえ」

そしてさらりとすごいことを言った。

「ところで、あなたの名前はなんでしゅか？」

黒ウサギが晴れやかな表情でそう訊いてきたので、桐也は黒ウサギをサッカーボールのように蹴り飛ばした。

(後書き)

本当は連載にしたかったけれど、完全に思い付きだけで書いた内容なので、続きが思い浮かばなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6332r/>

魔法少年トーヤ

2011年10月8日18時48分発行